

東日本大震災・緊急消防援助隊派遣を終えて



【所属】 枚方東消防署

【階級】 消防司令補

【名前】 上農 和範

私は、緊急消防援助隊大阪府隊第6次派遣隊として、3月13日から20日までの8日間、岩手県上閉伊郡大槌町で活動を行いました。当組合を出発したのが13日の15時、名神高速道路から北陸自動車道、磐越自動車道、東北自動車道を経由し、先発隊が活動している大槌町へ到着したのが14日の17時でした。約26時間かかって被災地を初めて見た時、想像を絶する津波の破壊力に言葉を失いました。建物はほとんどが流され瓦礫の山となっており、所々で火災が発生した跡があり一部くすぶっているところもありました。

そんな状況の中、我々大阪府隊第6次派遣隊は15日の朝より捜索活動を開始しました。作業は特別な救助資機材などは使用せず、※とび口やベンケイなどを使用しながら手作業により瓦礫を除去し、生存者を捜索する活動でした。そんな中、大槌町大槌地区で活動中に「民家に生存者あり！」という指揮本部からの一報が流れ、何としても助けなければとの思いで、救急隊とともに現場に急ぎました。1階玄関は流木でふさがれていたため、勝手口の割れた窓から屋内に進入し、まもなく1階廊下で毛布にくるまっていた75歳の女性を発見し、私とその女性の肩に手を置き「大丈夫ですよ。今から出してあげますよ。」と声をかけると、「ありがとうございます。」とホッとした表情を見せてくれました。すでに地震発生から92時間経過していました。女性は低体温症に陥っており、発見が遅ければ危なかったかも知れません。

その後も、「まだ生存者がいるはず」という思いで活動していましたが、残念ながら生存者を救出することはなく、発見される方はすでに亡くなられているという辛い現状でした。現場での活動中、崩れ去った自分の家をずっと見つめる方や自宅の持ち物を探す方、そして多くの遺体。そんな惨状が脳裏に焼き付き、ふとしたときにそのことを考えている自分がいました。そんな時私は、積極的に仲間と話をし、心にあるものすべてを話しました。その結果、気持ちもかなり楽になりました。おそらく私一

人だと気が滅入ってしまっていたかもしれません。話をするだけでも気が楽になるというのは本当にあると実感しました。

そして、我々大阪府隊第6次派遣隊は18日の岩手県の復興宣言を受けて、4日間の活動を終え20日に帰庁しました。

近い将来発生すると見られる東南海・南海地震を前に、今回の地震で得た教訓、派遣を通じて得た貴重な経験を後輩に伝え、今後の活動に生かすことが私達に課された責務だと思います。

- ※ とびぐち：木製の棒の先に鉄製の鉤（かぎ）をつけ、火災や救助活動時などにさまざまな用途で使用する道具
- ベンケイ：緊急時に強制進入するための工具